

現代の男性論

——日本の場合——

一 男性論成立の動機

自らを対象化するという営みは、自らに対する問題意識が生じたときに始まる。男性自身が「男性である」という存在形態に問題を感じたとき、男性論が始まった。

男性が男性であることに問題を感じるとき、その問題の感じ方に、大きく分けて二通りがある。

第一の人たちは、その時代・社会の「男性」のメルクマールに合致しない、したがって「男性」としては「劣等」とされる性質を持った人たちである。その極端な形態が「性同一化障害者」たちである。つまり客観的に「女性的」とされる特徴を持っているか、あるいは主観的に「女性」であると感じている人々は、「男性」でありたくないと思ひ、女性になりたいと思う。こうした

林 道義

人々は「なぜ男性でなければならないのか」と問い、「男性であるとは何か？」を問題とする。

「男性的」であることに疑問を感じる第二の人々は、フェミニズムの影響を強く受けていて、そのために「男性的である」とか「男らしい」ことが女性を抑圧したり、支配することにつながっていると考える。そればかりか、「男性的」であり「男らしい」ことが、女性ばかりか自分たち男性も抑圧し不自由になっていると考える。ここから、現代社会の家庭的な仕組みが、女性ばかりか男性をも抑圧しているという視点が生まれる。つまり男性は加害者・差別者であるばかりでなく、被害者・被差別者でもあるという認識を持つにいたる。ここから「男性の自己解放」という目標が生まれる。今日では、男性論の大部分がこの「男性の自己解放」を指すものになっている。

二 男性の弱さの自覚

男性が支配者で抑圧者だという認識から、男性自身も抑圧されているという視点へと転換し、それがさらに進むと「男性の弱さ」が自覚されることになる。男性は強いから支配しているのでなく、むしろ弱いからこそ支配の機構や制度を必要としているという説が生まれる。事実、女性と比べて男性の方が弱いまたは耐性がないと解釈せざるをえない現象が数多く報告されている。

たとえば自閉症は男性が女性の三〜四倍というデータもあるし、数々の遺伝病は男性の方が圧倒的に多い。また男性はストレスにも弱く、心筋梗塞など虚血性疾患や脳出血の可能性も多い。離婚した男性の死亡率は女性の三・一六倍、犯罪者の自殺も女性の四倍、一般の自殺者も男性の方がどの年代でも多い。

とくに多いのが「性同一性障害者」である。彼らは自分を女性だと感じ、または女性になりたいと思ひ、女装をしたり性転換手術を受けたいと強く願うまでにいたる。そこまで極端でなくとも、「男であること」に違和感を持ったり、「男」になりきれないで悩んでいる男性が増えている。

このような男性の「脆弱性」の原因としては、大きく分けて三種類の次元の異なる問題を考えなければならぬ。

第一は胎児のときに男女に分かれるにさいして、女の子は母体の中の女性ホルモンをそのまま浴び続けなければならないのに対して、

男の子の場合には、母体に特殊な変化が起こり、母体が男性ホルモンを出して胎児に浴びせなければならぬ。この転換がうまくいかないと、あるいは十分になされないと、外見は男性だが心理や性格は女性的だという存在として生まれてきてしまう。このような「男性」はとくに「性同一性障害」に悩むことになる。

第二の場合には、生まれてから比較的早い時期（二、三歳までと言われる）に、心理的な刷り込みに似た「性同一化」がなされる。これはたとえば男子の場合には父親との一体性を本能的に感じとって、男性と同一であることを確認する過程である。それはおそらく本能的感覚的な次元の心の働きによるものであろう。それがうまくなされないと、自分の性に同一化できない男性になってしまう。これはよく言われる「性別役割」が学習によってなされるといふよりも、もっと根源的なプロセスであり、遺伝とまでは言えないが、しかしほとんど本能的なプロセスである。もちろんそばに男女のモデルがないと起こりにくいから、純粹に本能とも言えないが、しかしそういう刷り込みに似た性同一化作用はあらかじめプログラミングされているプロセスである。

第三に、人格形成期における男性モデルの喪失という問題がある。とくに現代では家庭の中に父親が不在で（日本では苛酷な労働慣行のため、アメリカでは離婚の増加のためなど）母親だけと接触している男子は、男性としてのモデルが欠けているために、男性としてのアイデンティティを獲得するのにつねに困難を感じ

じている。しかも幼稚園、保育所、小学校では先生が圧倒的に女性が多いという環境の中で、男子はますます「男になる」ことに困難を持たざるをえない。

三 支配する男性の自己疎外の意識化

このように男性の弱さが意識化されると、現実社会の中で「弱い立場」や「被支配」の中に置かれている男性の認識・自己認識が進み、支配・抑圧している男性に対する分析も進むことになる。この分析はじつはフェミニズムの対象でもあり、両者は手を携えて男性の支配体制を批判するようになる。ここから近代家族への批判も出てくる。すなわち公の働く場所と私の場所である家庭との分離は「男は外へ働きに」「女は家で家事を」という性別役割分業を固定化し、男性の女性支配を強化したとされる。

この視点から見ると、仕事人間と化した現代の男性は、性別役割分業を固定化して女性に対する父権的支配を強化するばかりか、自らもまたその関係の中でエコノミックアニマルとして人間性を奪われているとされる。

そのような父権的な社会構造の中にあつては、すべての「女性的」とされる性質は軽蔑され排除される。たとえば理性性に対する感情、学習に対する本能、啓蒙に対する神話などは、価値の低いものとして否定される。その結果、エロス（関係づけという広い意味での）が男性から奪われ、男性に残されたエロスは身体的

セクスのに矮小化され、その視点が女性に投影されて、女性の身体が商品化される。こうして女性に対する男性支配が、男性自身のある方をも一面的に歪めるといふ面が意識化されていった。

このように男性支配が男性の中でも支配―被支配の関係を再生産するという視点から、男性マイノリティーの権利回復運動が生じてきた。この傾向は男性の中で「劣等」とか「異常」とみなされてきたメルクマールを持っている人々が、差別されたり抑圧されることに対する抗議として始まった。その典型が同性愛の価値の見直しである。同性愛は今まで「正常」だとされてきた異性愛に対して「異常」のレッテルを貼られてきたが、一方を「正常」他方を「異常」とする区別だては差別だという認識が出てきた。この視点は「人権」思想や「多様な価値観」思想とも呼応して、男性中心思想の見直しと、「男らしさ」の見直しにまで進んでいる。

四 「男らしさ」の否定

父権制が男性マイノリティーだけでなく、男性すべてをも疎外するという視点を提出したのが、「男らしさ」への批判である。

父権制のもとでは、男性は「男らしさ」の鎧を身にまとい、「強い」「たくましい」「くじけない」「感情を見せない」男として、戦って競争に打ち勝つことを求められる。それができない男は軽蔑され、落伍者とみなされる。「男らしさ」に適応できない男性

はみじめな状態に置かれる。

このように批判する者たちは、「男らしさ」とは鑑であり、仮面であり、無理をしているとみなす。したがって、それを捨てて「男らしさ」から解放され、ただ「自分らしさ」だけを持てば、男性は人間として解放されると考えられている。

その後にあるのは、男性も女性も人間として同じになれば平等になれ幸せになれるという思想である。これは女性が「女らしさ」を否定するのと同じである。したがって彼らは男性が女性と同じように家事をし、子育てをするようになるのを理想とする。それに対応して、女性は男性と同じように外に出て働くのが理想となる。

現代の男性論の特徴は、このように「男らしさ」そのものを否定してしまい、「男らしさ」の中身を吟味するという姿勢にならないところにある。そしてその場合に、「男らしさ」をことさらに悪く描くという特徴も持っている。たとえば「強くなれ」「弱みを見せるな」「競争に勝て」「敵を殺せ」「涙を見せるな」「泣きごとを言うな」「弱音をはくな」等々。

このように彼らは、最初から「男らしさ」や「男性性」を悪いものと決めつけるだけで、それがそもそも人間にとって一般的にどういう意味を持っているのか、それが現代において特殊にいかなる意味を持っているのかというように、方法的に考察するという視点を欠いている者が多い。

彼らの特徴は、男女の違いをなくすことを理想としているところにある。つまり素朴な男女同型論の立場に立っていて、その立場から「人間らしさ」と「自分らしさ」さえあれば十分だと論じている者が多い。これは「らしさ」の両極分解的思考法である。

この思考法はしかしきわめて危険な問題をほらんでいる。それはただ「楽」なことだけを求めて、面倒なことを避けるという意味で精神の頹廃の兆しであると同時に、次のような意味でアイデンティティーの獲得を困難にするからである。

子どもがアイデンティティーを獲得するためには、なんらかのモデルを必要とする。そのモデルの性質はある程度以上の明確さと具体性を必要としている。しかるにウーマン・リブやメンズ・リブは「人間らしさ」と「自分らしさ」で十分だと考えているらしい。しかしその基準はじつは最も極端に抽象的な規定性であって、子どもにとってのモデルにはなりえないのである。というように、子どもは「人間らしさ」と「自分らしさ」の中身を自分で獲得することを要求される。しかし子どもが自主的に人格の中身をまったく独力で獲得するということは不可能である。身近なモデルがなくては、人間はアイデンティティーの獲得にたいへんな困難を感じなくてはならない。男の子は「男らしさ」の、女の子は「女らしさ」のモデルが必要である。それをみな否定してしまつて、のっぺらぼうの「人間らしさ」と「自分らしさ」だけを提示しても、何もモデルを提示したことにはならないのである。

五 「男らしさ」の概念の必要性

男子がアイデンティティを獲得するためには、モデルとしての「男らしさ」が必要であることを述べたが、次に問題としなければならぬのは、その「男らしさ」の中身である。ウーマン・リブやメンズ・リブは「男らしさ」「女らしさ」をことさらに悪く描いて否定する傾向がある。しかし一定の観点から「悪い」とされる特徴だけを挙げて、その特徴を持っている概念それ自体を全体として否定するのは、正しい判断の仕方ではない。

人間には、その立場に応じた理想のモデルが必要であり、そのモデルは単に「自分らしさ」という抽象的な規定性だけでは決定的に不十分である。「らしさ」は人間の中の一定の特徴を持った集団ごとに設定されなければならない。つまり「人類」と「個人」のあいだの、さまざまな集団ごとに、「らしさ」が必要になる。したがって「男らしさ」と「女らしさ」だけでなく、さらにこまかく「先生らしさ」とか「政治家らしさ」とか「公務員らしさ」などというものも必要になる。

そういう「ある集団が共通に持つていなくてはならないと考えられる性質」が「らしさ」である。その「らしさ」は、母集団が大きくなければならず、あいまいで抽象的になる。たとえば「人間らしさ」を定義しようと思うと、人それぞれで異なってしまう、おそらく誰もが賛成する「人間らしさ」は出てこないであろう。

「男らしさ」「女らしさ」についても同様の困難さがつきまとう。しかしだからと言って「男らしさ」そのものを否定してはならないのは、「人間らしさ」の定義が困難だからと言って「人間らしさ」を追求することを放棄してはならないと同様である。

これまで日本人が考えてきた「男らしさ」の中には、現代的な感覚から見ると肯定しがたい内容があることは確かである。しかしだからと言って、「男らしさ」それ自体を否定するという態度は間違いであろう。「男らしさ」の内容をよく吟味して、必要ならば改訂しながら、もう一度男性の精神的なあり方の目標として立て直すことが必要だと思われる。

「男らしさ」を見直す場合に、大切なことは、精神的な性質に注目することだと思われる。私はかつて「男性性」の定義として、「精神的な強さ」と「精神的な高さ」を提示したことがある（渡辺恒夫編『男性学の挑戦』新曜社、一九八九年）。

「男らしさ」は男性支配のための概念だけでなく、また男性を縛って窮屈にし抑圧するというだけのものでもなく、男性自身の理想や目標として掲げることが可能である。

六 女性性との関係をどう捉えるか

男性性・女性性という概念の必要性を認める人でも、それらが男性と女性に固定的に割り振られることに反対し、男性が女性性を持ち、女性が男性性を持つことが必要だと説く人たちがい

る。いわゆる両性具有を理想と考える人たちである。

この人たちは男性が女性的な性質を持ち、女性が男性的な性質を持つことを理想としている。彼らはいわゆるクロスオーバーをして、男性も女性も男女両方の性質を持つべきだと考えている。

この考えを徹底させていけば、男女の違いはなくなる方向に行くであろう。この考え方は正しいであろうか。私は正しくないと考えている。どこが正しくないかと言うと、男女の違いというものを無視しているからである。

男女の違いをなくせばなくすほどよいと考えている人たちは、男女の違いがすべて歴史的文化的に「作られたもの」だと考えている。しかし男女の違いは遺伝的な部分においても、また最初期（二、三歳までの乳幼児期）の「刷り込み」にも似た基礎的体験（父母の違いの原体験）によっても、本能的・身体的・生理的な次元で、一定の所与として与えられている。その上に性別役割分担についての特殊歴史的な観念が付け加わる。

男女の違いはこの三段階を経過して現実のものとなるのであり、個々の特徴がどの段階に由来するのかを確かめた上で、対処するのでなければならぬ。たとえば男女の色の好みは、単に第三段階の文化的規定性だけによるのか、それとも第二段階の原体験によるものか、どちらかを見定めるといふ姿勢が必要である。もし第二段階によって規定されているものだとしたら、最近のフェミニストたちのように、「男子は暗色系統の色、女子は赤い系統の

色と決めつけないで、男子が赤い色、女子が青い色を着てもいい」などと簡単に決めつけることは危険だということが分かる。それを機械的にやると、男子も女子も性的なアイデンティティを持つことに困難を感じることになりかねない。

男性性と女性性の相互乗り入れの問題は、それぞれが男性性と女性性を確立した上で、自分に欠けている面を「取り入れる」という形で進めるべきものである。そもそも自我が形成されるときに、男性の場合には男性性が優越機能となり、女性性は劣等機能となる。男性は女性性を「取り入れる」ときに、女性性を優越機能にするのではなく、劣等機能なりに洗練するのが望ましい。優越機能と劣等機能を逆転させたり、まったく対等のものとして扱うことは、むしろ人格のバランスを欠く結果となり、心の健康にとって望ましくない。（この点については、「日本ユング研究会通信」『ラピス』第二号でやや詳しく論じている。またユング『タイプ論』を参照されたい。）

おわりに

男性論はフェミニズムの主導のもとに成立した。したがってそれは第一にフェミニストの女性が自らのあるべき姿を構想したときに、それに見合うパートナーのあるべき姿をイメージし、それから現実の男性がいかにはずれているかを論じるという形を取るものが多かった。

それを受ける形で、男性自身が、女性と同じように父権制に
よって抑圧されていると認識した場合が、第二の型の男性論とな
る。その特徴は男性としての特徴を否定する傾向にあり、たとえ
ば「男らしさ」を否定し、それから「解放」されることを目標に
する。

第一の型も第二の型も、男女の違いをなくす方向を目指してお
り、また自分の内面的なあり方としても、心の中の男女両性具有
を理想とする場合が多い。

今後は男性自身の手で男性論が展開されるべきだが、その場合
にも、男性独自の特徴と価値を見失うことのないようにすべきで
ある。しかしだからといって女性性の価値を否定するのではなく、
それを認めて、それと協力調和の関係を持つことのできるような
形で男性性を考えていくことが望ましい。

(本稿と同じ問題をさらに詳しく論じたものとして、拙稿「男性
学方法論序説」(『東京女子大学比較文化研究所紀要』第六〇巻、
一九九九年、所収)をも参照されたい。)

(はやし・みちよし、哲学・人間学・深層心理学、

東京女子大学教授)